
冥界の守護者

黒川 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥界の守護者

【Nコード】

N8467T

【作者名】

黒川 咲

【あらすじ】

国境を越えれば死霊じりょうが跋扈いっばしているスピーリーズ王国。その国状から、死霊を操るネクロマンサーは忌み嫌われ排斥されていた。そんなスピーリーズ国のある町に変わった少女、テラがやってきた。『アンティーク屋』という店で一人で骨董品に囲まれて暮らしているらしい。しかも彼女は独り言が多いらしいが、その真実は。魔術の天才少女テラと「黒曜石」のネクロマンサー、セオの織りなす少し不思議な物語。短編連作のような形になる予定です。

第一話 不思議なアンティーク屋（1）

ここはスピーリーズという大きな国。

今でこそ平和だが、三十年前まではこの国は戦乱状態だった。本来冥界にいるはずの死霊たちが大勢攻めてきたのだ。

死霊たちの要求は、この国から王が退き政権を自分たちに譲ることだった。

しかし国王軍や警邏隊の活躍により勝利を収めることができた、人々はいまだに死霊の影に怯えて暮らしている。

その世情から、この国では死霊を操るネクロマンサーは忌み嫌われる存在となっている。

そのスピーリーズにあるサークイルムという町に、一軒の店ができた。経営しているのは一人の少女だという。そして、その店の扱うものは少し変わっているらしい。

何でも、『古いもの』ならどんなものでも引き取るといふ。例えば大叔母の大事にしていたティーセットとか、戸棚の奥にしまいかまれていた時計だとか、ページが黄色くなった書物だとか……。

その店はほとんど引き取ることが主体となっているが、なぜか少女はその商売だけで生計を立てているという。

もちろん、店に買い物に来る人もいるにはいる。しかしその収入は十分な金額ではなく、安定もしていない。聞けば彼女は孤児院出身だという。そうなれば親の仕送りなどもないのだろう。

その得体のしれない店は、町ではささやかな噂になりつつあった。

* * * *

ふつつと溜息をついて、少女は本を閉じた。

「雨あがないなあ……」

少女が感慨深げにつぶやいた。

『なんだ、出かける用でもあるのか、テーラ』

どこからともなく声が聞こえてきた。

少女がいるのは一軒の店で、壁際にはたくさんの棚が並んでいる。棚にのっているのは本や時計やティーセットなどの使い込まれた感のあるものたちばかりだ。これらのものは、少女が商談の末に引き取ったものである。

あるのはそんな古い物ばかりで、少女 テーラのほかには人影などない。

「特に用はないけど、よく降るなあと思って」

しかし少女はその声に当たり前のように返事をする。

「もし晴れたらクーレまで行こうかと思っただけだ」

『なるほど、あそこは田舎だからじいさんはあさんがいっぱい住んでるしな。もしかしたらアタリがあるかもしれないな』

「しばらく見つけられてないもんね……。セオ、魂はまだ大丈夫？」

テーラは首にある革製のチヨーカーをいじりながら言った。

その暗い赤色のチヨーカーの中央に黒く丸いつややかな石がはまっている。

『ああ、前の時に多く頂いたからな、まだしばらくは大丈夫だ』

声は気楽な調子で答えた。

そっか、と返事をしながらテーラは立ち上がった。そして今まで読んでいた本を返そうと棚の一つに近づいた時だった。

チリンチリン……

ドアについている小さなベルが鳴った。

振り返ってみるとドアを少し開けてこちらを覗いている七歳くらいの女の子と目が合った。

「いらっしやい、何の御用かしら」

テーラが優しく言つと、女の子はそつと店に入ってきた。

「あの、この店は古いものを引き取ってくれるって聞いたんだけど……」

女の子は棚に並ぶ品々を珍しげに眺めながらおっかなびっくり切り出した。

「ええ、そうよ。ここはアンティーク屋だもの。今日はどんなものを持ってきてくれたのかしら」

「あの、どんなものでも引き取ってくれるんですね。どんなに古くても壊れてても使えなくても……その、えつと、あの……」

言いにくそうにしている女の子から何かを感じ取り、テーラは女の子と目を合わせるようにしやがみこんだ。

「もしかして、オバケがでるとか？」

おどけたテーラの言葉に、女の子ははつと顔をあげた。そして、こくと頷いた。

「お父さんとお母さん以外は誰も信じてくれなくて、でも捨てる気にもなれなくて、どうしようか悩んでたらこのお店の噂を聞いたの」

女の子 エミ が持ってきたものは、銀製のペンダントだっ

た。なんでも、最近亡くなった祖母のもので、エミが形見として受け取ったらしいが、毎晩十二時になるとすすり泣きが聞こえてくるのだという。

最初は信じていなかった彼女の両親も、実際にその鳴き声を聞いてからは表情を変えた。エミに何度も捨てようと言いつつ聞かせたが、エミは大好きな祖母のペンダントを捨てるなどしたくなかった。

どうするか考えているうちに、近所のおばさんたちの噂話を偶然耳にした。

どんなものでも古いものならば引き取ってくれる骨董品屋があると。。。

「最後の『骨董品』っていうところが気に入らないわね。ここは『アンティーク屋』よ」

帰ったら近所のおばさんたちに訂正しておいてね、とテラはエミに言った。

『別に骨董品もアンティークも変わらないだろう』

面白がるように言う声にテラは無言で首元の黒い石を指ではじいた。

その突然の行動にぽかんとしていたエミに、テラは慌てて取り繕った。

「話がよくわかったわ。つまりあなたは、このペンダントが夜なかに泣き出すのが怖いけど、おばあさんの物を捨てるようなことはしたくない。そういうこと？」

エミはその言葉に、うんと答えた。

「それじゃ、三日後のこの時間にもう一度来てちょうだい。その時

にこのペンダントをお返しするわ」

にっこりと笑って言ううテラに、エミ は目をぱちくりさせた。

「あたし、ペンダントを引き取ってもらいに来たんだけど……」

「大丈夫。三日後にはオバケもいなくなっているから」

自信ありげに言ううテラに不信感を残しながらも、エミ は帰って行った。

第一話 不思議なアンティーク屋(1) (後書き)

同時連載になってしまふんですが書きちゃいます。

多分こっちのほうが進むと思います。

誤字脱字などご報告くだされば嬉しいです。

第一話 不思議なアンティーク屋(2)

「セオ、これどう思う?」

テーラは自分の顔の前までペンダントを持ち上げた。

楕円形のそれはすこし汚れているものの、すばらしい銀細工が施されていた。花やツタが絡みつくように描かれており、上品さが漂っている。

『間違いないな。呪いがかけられているわけでもなさそうだし、大当たりつてとこだな』

やっぱりそうだね、とテーラはペンダントをひっくり返しながら頷いた。

『それにしても、それ返しちゃうのか?結構いいものだと思うぜ、それ。たぶん俺の世代くらいに作られたものだ』

「それならなおさらあの子に返さなくちゃ。マリーだっておばあちゃんの形見を手放すのは嫌だと思ふもの。こっちの用がすんだら長い間持つている必要はないよ」

テーラは長い茶色の髪を後ろに振り払いながらはつきりと言った。「とりあえずは、」泣く”””っていうのがどういことなのか確かめてみないと」

『じゃあ夜中の12時まで起きておくつもりなのか?それなら俺を違う部屋にでも連れていってくれ。俺、夜は静かに過ごしたい派なんだよ』

「何言っているの。セオには睡眠なんて必要ないじゃない」

『……おまえ、たまにひどいこと言うよな』

そう?と軽く返事をして、テーラは首にある黒い石を軽く小突いた。

「そろそろだね」

テーラは今は手のひらの上にあるチョーカーに向けて言うと、「やっとか」という返事が返ってきた。

時刻は0時5分前。場所は店の二階のテーラの寝室。

結局セオはこの時間までおしゃべりに付き合わされていたのだ。例のペンダントはベッドわきの小机にハンカチを敷いて置いてある。それが、隣に置いてあるランプの光に照らされて鈍く光っていた。

ミリーの話では、夜なかに「泣きだす」ということだった。テーラはミリーのおばあちゃんがどんな人だったのか全く知らない。だが、やはり泣くということは何か思い残したこともあるのだろうか。

「ねえセオ。どうしてこのペンダントは泣くんだろう」

ぼんやりと考え込んでいたテーラはふとセオに聞いてみた。

『そんなこと俺にわかるわけないだろ』

そう言うってから少し間をおいてセオは再び話し出した。

『俺には死者がなぜ泣くのかは分からない。まだ死んだことがないからな。だが、おそらく自分のために泣いているのではないんだろ』

「自分のためではない？」

『自分のために泣いたって仕方ないだろ。自分の死に対して感情が湧くなら、それは悲しみではなく恨みとか憎しみだろ。それも自然な死の方ではなかった場合のことだ。』

泣くってというのは他人のためにするものだろ？」

それを聞いて、テーラはなるほどと納得する。

自分自身の境遇を思っ泣くのは、それはつまり自分の周囲に
対しての憤りや悔しさを表しているのだ。

「テーラがさらに深く考えようとすると」来るぞ』とセオが注意
を促した。

突然銀のペンダントが震えだした。

ハンカチで音は吸収されているが、なかったらカタカタという音
がしていただろう。

ランプの灯が揺れた。

そしてその灯の揺れに合わせるように小さく囁くような声が聞こ
えてきた。

……ごめんね……約束……のに……一緒に……って……に……

かすれた声はとぎれとぎれにしか聞こえなかった。

だがその声も長い間は続かず、すぐに消えていった。

カタカタというペンダントの振動も止み、ランプの明かりも元通
り穏やかなものになっていた。

「セオ、今のって……」

「ああ。恐らくこの人の 最期の想 なんだろうな。それが、その
時身に着けていたこのペンダントにくつついちゃまったんだろうな」

セオは淡々と推測を述べた。

命と魂は全く別々の物であるが、同時に引き離すことのできないものでもある。

テーラと会ってすぐのころにセオが言った言葉だ。

魂というのは人の人格そのものであり、地上では一か所に留まっていられないほど軽くて不確かなものだ。

一方命というのは、その魂を体に縛り付けておくための重りのようなものだ。

命が尽きれば魂は地上を離れ、冥界へと流れていくのだ。

だがときどき、何らかの理由で命の一部が物に移ってしまうことがある。

そうするとそれとともに魂の一部もその物に宿ってしまい、完全には冥界へ行くことができなくなってしまい、“幽霊”などといったようなものになってしまうのだ。

テーラは銀のペンダントを手に取り、そつとその表面を撫でた。少しくすんだ色をしたそれをいたわるように……。

「で、今片付けちまうのか？それともあしたにするのか？」

セオは瞑想にふけるテーラをしばらく待っていたが、やがて耐えかねたようにそつと声をかけた。

「そうだね。もう遅いし、明日にするよ。エミーには三日後って言つてあるしね」

ふわあと大きくあくびをして、
テーラは明かりを消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8467t/>

冥界の守護者

2011年7月27日00時28分発行